

平城宮跡第3収蔵庫の建設

平城宮跡発掘調査部

1968・1969年度に資料館と第1・第2収蔵庫を建設して再出発した調査部における施設整備の第2段階として、このたび北接位置に第3収蔵庫を増設した。

これは増加する一方の出土遺物の収蔵のほか、仮設プレハブで行っていた遺物の清掃整理や保存科学的処理の作業環境を改善すると同時に、長い間の懸案であった発掘作業員の着替所を設けることを目的としている。いわば、調査部の発掘作業と出土遺物の処理に密着した部門を統合したものである。

建物は宮跡内であることから、遺構に影響をあたえないこと、環境を著しく損わない意匠であること、将来撤去可能であることなど、資料館建設当初の基本計画にもとずき設計された。

東西棟の1階は収蔵庫と警備室にあてる（一部を間仕切って仮に埋蔵文化財センターの事務及び研究室として使用）。収蔵庫は保存処理をほどこした木器の収納棚、処理前の木器をいれる水槽、真空凍結乾燥処理をほどこした木簡などをいれる空気調整装置をつけた特別保存庫からなる。2階は遺物整理関係の作業室であり、各室に水洗場をそなえる。木器、金属整理室には金属の整形過程に生じる粉塵を吸収するための装置をつけた。瓦整理室には、土ぼこりを吸収するダクトをつけた作業台を設置した。なお、階下からの遺物の運搬にはリフトを使用する。

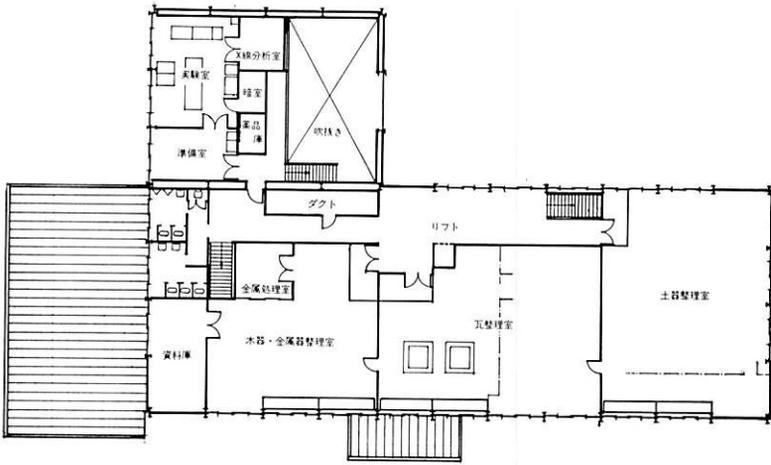
北面の張出部は、保存科学部門を収容する。1階のP. E. G.含浸処理室は、木製品に対してポリエチレン・グリコールを含浸する。大型の柱材にも対応しうるよう全長6mの含浸タンク2機をそなえる。大型遺物の移動を円滑にするためホイストをもうける。室内が高温多湿になることを配慮して天井に大型排気装置をつけた。樹脂含浸室は、金属遺物にアクリルエマルジョン等の合成樹脂を含浸するための部屋である。真空含浸装置を中心とする器材をおき、有機溶剤による公害対策として、室外に活性炭による濾過装置をおく。凍結乾燥機室では、凍結乾燥によって木簡などの木器を保存する。乾燥機のほかT. B. A.による前処理装置や簡易防爆装置をそなえる。戸外には柱根などの大型木器を一時的に保管する水槽を設けている。

2階の実験室では、木簡削片の保存処理、ならびに保存処理に関する基礎実験、材質分析等を行う。このため、木簡削片プレバート製作機、実験台、ドラフト、恒温恒湿機、X線回析、蛍光X線分析装置等をおく。X線分析室では、銹などで隠れた形や文様をレントゲンで透視し修理などの処理にそなえる。装置は100KVと160KVの2種あり、使用目的に応じて使いわける。このほか2階には準備室・暗室・薬品庫などを設けている。

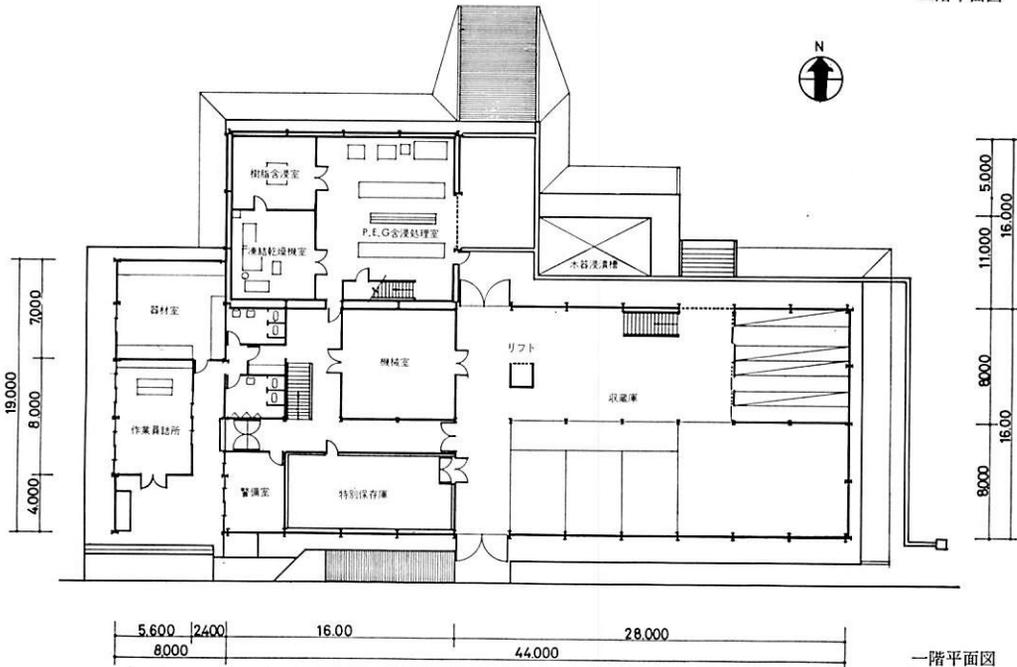
基本設計は入江・三宅設計事務所が行い、実施設計および工事監理は建設省近畿地方建設局があたった。施工は株式会社森組である。なお、次年度以降、同規模の施設をこの北側に増設し、全体を東向きのコ字形にまとめて、資料館を中心とする発掘調査用施設整備は一応完了することになる。

(細見啓三・町田 章)

平城宮跡発掘調査部



二階平面図



第3 収蔵庫平面図

建築概要

建築面積 1,061.9㎡

延面積 1階：1,061.9㎡，2階826.3㎡，合計1,888.2㎡

構造および仕上げ 主体部，鉄骨造。屋根，コルテン鋼山型プレート葺。外壁，A・L・C版，一部C・B積み，色モルタル吹付け。内部床モルタルコテ押さえ，一部フローリング張り。内壁，A・L・C版，C・Bあらかし，西北保存科学一郭のみA・L・C版張り間仕切り壁，C・Bまたはアスベストラックス。天井，軽量鉄骨下地フレキシブルボードまたはプラスターボード打上げ。屋根鋼板下，断熱材吹付け。